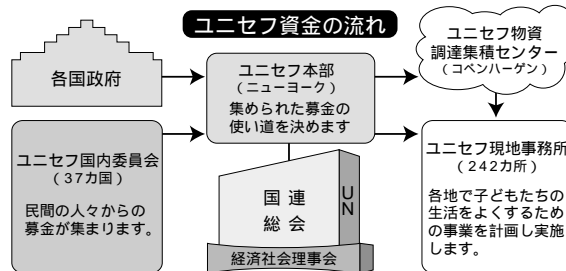


基礎講座

UNICEF

ユニセフの事業資金は政府からであれ民間からであれ、100%任意の協力によっています。そのため、資金は可能な限り有効に使われなくてはなりません。そこで、今回はベニンにおける予防接種事業を例に、資金の有効活用のためにどのような工夫がなされているかを報告します。



第8回 ユニセフ募金を有効に使うために

伝統になじまない事業の実施

～予防接種実施の陰の苦勞～

ユニセフは予防接種の普及を通じて子どもの死亡率を下げる努力を行っています。しかし、その実施はなかなか容易ではありません。アフリカのベニンでも予防接種事業の成功の陰に苦勞がありました。

ベニンでは国民の70%弱が古代からの民間信仰であるブドゥー教を信仰しており、その大部分は農民です。最初予防接種を実施しようとした時の人びとの反応は、「私たちの子どもには予防接種をする必要はありません。ブドゥーの祈りや儀式により子どもたちは守られているからです」というものでした。確かに、予防接種についてよく知らない人びとにとって、注射をされ大泣きする子どもを見ると、なぜわが子がこんなことをされなければいけないのかと不安を持つのももともです。

こうした予防接種に対する不安を払拭し、予防接種がどういうものであるかを住民に理解してもらうことから事業は開始されます。しかし、それは忍耐を要するプロセスです。保健員が、焼けつく太陽や激しい雨の中、道なき道を荷物を持って20キロの道のりを歩いて村に行っても、ブドゥーの伝統から抵抗に出くわすことも珍しくありません。それゆえ、地域の人全体に予防接種について知らせる集中キャンペーンなどの効果的な社会動員を行わないと事業は進みません。そこで、社会の支援を得るための鍵を握っているのが指導者です。

ブドゥー教の指導者や村の指導者が自分の子どもや孫に予防接種を受けさせ、他の人びともそれを勧めれば、地域に徐々に予防接種が広がり、ついには地域全体が予防接種を受け入れるようになります。子どもが泣き叫んでも、予防接種を受けさせたために子どもが健やかに育った。一方、予防接種をさせなかった親は子どもを

なくしてしまった…。こうした実体験を持つことにより、住民たちは子どもに予防接種を打たせるようになっていきます。適切な訓練を積んだ保健員が予防接種の効果を粘り強く説明し、接種をすることで、少しずつ広がりがでて、全国に伝わるのです。村の長老から親、ブドゥーの指導者、教育者にいたるまで広く理解を得ることが必要です。こうした一見遠回りに見える地道な取り組みを国レベルで実行した結果、1997年には1歳児26万人弱に対する予防接種率は、はしか82%、ポリオ78%、結核89%、3種混合（破傷風、ジフテリア、百日咳）78%の成果となりました。



© UNICEF 29831 Murray-Lee



© UNICEF 29801 Murray-Lee

この6種類の予防接種を打つのにかかる費用は諸経費を含め一人当たり15ドルです。そして、こうした成果を得るための事業資金はユニセフだけが負担するものではありません。ベニン政府も、予防接種の事業実施地域もできる範囲で負担するように工夫されています。というのはユニセフの支援事業は援助を受ける国の自立を目的としているからです。この事業でも、年間事業費の50%以上を政府が、そして予防接種実施地域が25%を、そして残りの25%以下をユニセフが負担しています。

ユニセフの事務所に行くと、「Fund in Trust」と書かれた標語を見ることがあります。これはユニセフの事業資金は「信託された基金」であるので、ユニセフ事務所のものではない。政府であれ民間であれ、協力いただいた方々から信託されたものである。よって1円たりとも無駄にはできない、という気持ちをあらわしたもののなのです。

